



他者に助けを 求める行動を認める (援助希求能力)

「教えて」「助けて」と言うことは、恥ずかしいことやズルいことでなく、大切なことだと伝える。

学習方法（調べる、話し合う等）、ペアで出題し合う問題、発表し合うテーマ等を児童生徒が選べるようにする。教師は選択肢を提示する。

静かな時間を設定し、メリハリを作る

一人で考える等、教室が静かな時間を設定する。話し合い活動は活発にして、授業にメリハリを作る。教師の作る教室の雰囲気、児童生徒は集中力を高める。

思考をゆさぶる質問をする

「AかBか」「賛成か反対か」のように論点を絞ったり、「Aでない確かな証拠は?」「Bの可能性は?」「AとBを合わせたら?」等と質問して、思考を深める。粘り強く考える力を育てる。

話の聴き方を指導する (相手を尊重する)

あ 相手を見て
い 一生懸命に
う うなずきながら
え 笑顔で
お 終わりまで聞こうと指導する。丁寧に話を聴くことを“相手を尊重する行動”として価値づける。

自己決定の 機会をつくる

児童生徒は自分で選択・決定することで、やる気を高める。

間違いを歓迎し 間違いを生かす

「教室は間違ふところ」「間違いは学びの宝」間違いを歓迎する雰囲気を作る。不正解のプリントの一部を匿名で扱うことも効果的だが、個人情報の扱いに気をつける。

チャレンジした ことを認める

「ナイスチャレンジ!」失敗してもチャレンジしたことに価値があると励まし合う学級の雰囲気を作る。難しくてもチャレンジすることが大切だと教える。

ホワイトボード等を 活用したグループ活動

ツールを使ってコミュニケーションを促進する。多様なグループ編成で人間関係を流動化し、活動に加わることを苦手とする児童生徒へサポートを行う。

認め合い、励まし合い 拍手とハイタッチ

児童生徒が互いに望ましい行動を認め合える仕組みを作る。「グッド・ビヘイビア・カード(PBIS)」等を取り入れる。拍手とハイタッチを習慣化し、感動を共有する演出家となる。

休んだ児童生徒を フォローする

休んだ授業のプリント、ノートを見せ合える学級づくりを行う。ICTの活用も有効になる。授業の序盤で前時を復習し、休んだ児童生徒が遅れを取り戻せる時間とする。本人に個別補習が必要か確認し、できる限り希望に合わせて指導を行う。

教師もミスしたら 素直に謝る (見本となる)

人は誰でもミスをする、素直に謝ることが大切であることを伝える良きモデルとなる。教師へ親近感を持てるようにする。児童生徒も教師へ自己開示しやすくなる。

些細なことでも ほめる、認める

望ましい行動、続けてほしい行動は、すぐにほめる・認める（行動が繰り返されるようにする）。些細なことでも認められることで自尊心が高まる。

〇〇さんと 名前と呼ぶ 目を見て話を聞く

「あなた」「〇番の人」ではなく、「〇〇さん」と名前と呼ぶ。目を見て話を聞き、黒板にはネームプレートを活用する。

教室での第一声や 挨拶を大切に

笑顔で教室に入り、明るく授業を始める。教師の第一声で授業の雰囲気を作り、教室で児童生徒と共に笑う。楽しく授業をしている教師は、児童生徒に学びの楽しさを教える。授業終了時の挨拶も丁寧に言い、挨拶の大切さを伝える。

教師が安全基地 となる

教師が否定せず、認める存在になる。児童生徒は安心感・安全感を抱き、主体的に活動始める。丁寧に話を聞き、頑張ったことや嫌だと思ったことを理解し、一緒に考える。

児童生徒を信頼し 心から期待する

「できる」「期待している」「信じている」と素直に伝える。押し付けず、当然のこととして信頼する。児童生徒は信頼されることで、期待に応えようとする。

一人では解決が 困難な課題を提示し、 対話や協力の大切さを教える。

教師も児童生徒から学ぶ姿勢で共に悩む。試行錯誤することが、分かった時に得られる感動を高める。

児童生徒と 共に悩み 試行錯誤する

明確な発問と具体的な指示により、自分の考えを持ちやすくする。「ノートに自分の考えをまとめよう」「〇個以上見つけましょう」「何が違いますか?」等の働き掛けをする。

すべての児童生徒に 出番を用意する

ペア・グループ活動や発表形式の工夫等で、出番を増やし、全員が授業に参加している状態を作る。グループ活動ではすべての児童生徒に役割（司会、記録、発表、ほめほめ係、お助け係など）を用意する。

「できる」「期待している」「信じている」と素直に伝える。

押し付けず、当然のこととして信頼する。児童生徒は信頼されることで、期待に応えようとする。

「〇〇って何なの?」等の児童生徒のつぶやきは、「いい疑問だね、みんなはどう思う?」と広げる。

児童生徒の「あれ?」という表情もキャッチする。

児童生徒が発言する時間を大切に

する。それは児童生徒本人を大切にしているメッセージとなる。

自分の考えを 発表する場を作る

ペア→グループ→クラスと発表の範囲を徐々に広げる。ハンドサインなど（賛成はグー、反対はパーを挙げる）で全員が自分の考えを示す。

教師ができることであっても、児童生徒へ手伝いをお願いする。

その後に感謝を伝えることで、児童生徒は自分が役に立つ存在だと感じる。そして、次も役に立ちたいと考える。

話し合い活動で、他者の多様な意見を認めるよう促す。

多様な考え方があることや自他を大切にすることを体験的に学び、他者理解・自己理解を深める。

意見の違いを認める (多様な考え方の理解)

ただたどしい 発言でも 言い終わるまで 待つ

自分の考えを 発表する場を作る

教師ができることであっても、児童生徒へ手伝いをお願いする。

イラストで見る 生徒指導・教育相談の視点を生かした学習指導